

黄銅合子の模造で得た新知見

— 正倉院宝物模造の意義 —

西川明彦

模造の歴史と意義

正倉院事務所では昭和四十七年より模造事業を実施しており、平成十七年度現在四十件五十三点を数える。いずれも原宝物と同じ材料、同じ技法を用いて、宝物の製作当初の姿を再現する復元模造であり、古色付け等を行なって現在の姿に似せる現状模造ではない。

これら模造に当たっての方針や意義は、昭和四十二年に帝室博物館によって計画実施された事業のそれを受け継ぐものである。その際に唱えられた意義としては、大正十二年の関東大震災罹災によって模造の重要性が認識されたことを受け、まず、「原品万一の場合尚其典型を留めること」が挙げられ、「學術研究に資するものであること」、「公衆の観覧に供すること」と続く。これより前、明治時代における宝物の模造は、古器旧物保存、殖産興業政策に呼応して奈良博覧會社によって製作されたものや、宝物の整理と修理に際して御物整理掛によって製作されたものが知られている。それぞれ、目的に応じた模造が作られ、現在行なっている模造と同じような方針で作られたものもあれば、中には外見を似せただけのものも含ま

れる。

現在行なっている模造は分析装置やX線透過装置を駆使するなど科学的な調査を実施し、その結果を基に着手する。模造に当たっては宝物を原初の状態に復することを原則とするが、宝物の欠失部や後補部について、原初の状態が究明できない場合は、現状模造も余儀なくされる。宝物には経年劣化により脆弱なものもあり、貴重な古文化財であるが故に調査には制約がある。また、科学は決して万能ではなく、材料・技法ともに、すべてが解明されとは限らない。そこで、製作者が身につけた伝統的な手法および経験から得た知識を頼りに作っていくことがしばしば起こる。ただし、現代に伝わる伝統技法は古より淘汰され、洗練されたものであり、必ずしも正倉院宝物の作られた古代にまで遡れるものではない。そのため、文献史料等を参考に試作実験を繰り返し行い、材料や技法を吟味した末に、漸く完成に漕ぎ着けるのである。この不明な部分に製作者とともに取り組む作業は、模造事業の担当者一人として最も苦勞する部分であり、また、同時に最も醍醐味を感じる作業でもある。実は完成した模造品、つまり結果より、むしろその過程で得られる知見こそ古代の技術を知る上で最も重要であり、現在行なっている模造

の第一の意義はこの作業に見出せるのかもしれない。

黄銅合子の模造（口絵³）

ここでは平成十六年度に金工家般若勘溪氏に委嘱して製作した黄銅合子の模造を例に、それによって得られた様々な知見を紹介してみたい。

黄銅とは真鍮のことで、本品はその黄銅を鑄造して形づくり、轆轤で挽いて仕上げた印籠蓋造りの容器である。五重相輪をかたどった塔形鈕を持つ蓋と台脚を備えた身から成り、仏前で焚く香を入れたものと考えられている。

構造は蓋、身ともに、それぞれ別に作った相輪や台脚など数多くの部材を組み合わせて作られていることが外観より窺え、漠然と銕を打って接合しているものと考えられてきた。身については、確かに内面から銕をさし通して、台脚底裏に出た銕脚をかしめていることが確認できるが、蓋の構造については具体的には分かっているなかった。今回の模造を機に、X線透過撮影を実施した結果、蓋は相輪先端に見える宝珠から心棒を伸ばし、相輪、刹、基壇、蓋本体を貫通させ、蓋内面に突き出た心棒の先端に穴を穿ち、そこにテーパーピン状にした銕を打って止め付けていることが判明した（図1）。各五枚の相輪と刹、およびそれらの間に挟まれた計五十枚以上におよぶ座金をしっかりと固定するには、かしめる方法ではうまく行かず、このテーパーピン状の施工こそが最も適した方法であることを試作により確認した。

また、各部材に細かい点や線で文様が刻まれていることは従来よ

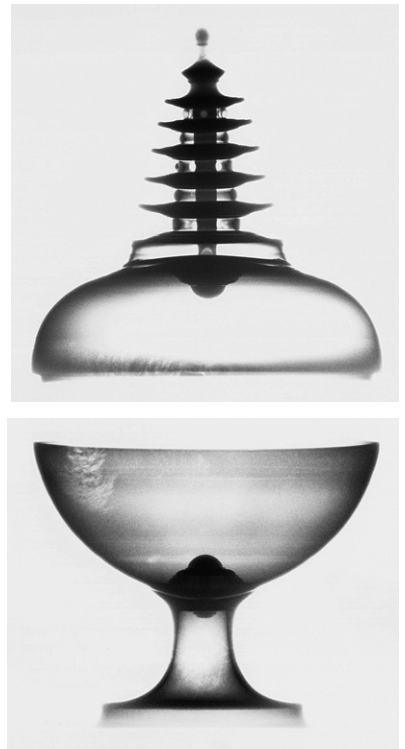


図1 黄銅合子 X線透過写真

り知られていたが、刹の線刻部分に、初層から第五層にかけて、段階的に赤から白にいたる暈縞の配色で顔料を充填していることも新たに確認した。

しかし、前記の暈縞の顔料や、刹に詰められた緑のガラス荘玉およびその接着剤、それに線刻や魚々子文などを際立たせるべく充填された黒色の脂状物質など、その存在については確認できたが、材質の究明には至らなかった。他に類例も見あたらなかったため、これら不明なものは八世紀当時の東アジアで一般的に用いられた材料すなわち顔料は鉛白や臘脂、ガラスは鉛ガラスを銅で色を着けたものの、それに膠や漆などを用いた。また、黄銅の色は経年によるものではなく、色付けしたものと確信するが、現代の色付け技法では再現できなかった。

このようにいくつかの課題を残しながらも、新たな知見を反映させて黄銅合子の再現を試みたが、その作業は平成の今の技術をもってしても非常に困難であり、あらためて古代工芸の技術の高さを痛感させられた。

（にしかわ あきひこ 宮内庁正倉院事務所保存課整理室長）